

ガウディ生誕一五〇周年

鳥居徳敏

本年二〇〇二年はガウディの生誕一五〇年にあたる。

ガウディとは、私が専門としている建築家アントニオ・ガウディ・イ・コルネットのことである。一〇年前、バルセロナ・オリンプック時には日本でもよく耳にする存在であったが、最近影を潜めていた。ところが、昨年後半のネスカフェの宣伝（彫刻家外尾悦郎氏によるもの）で、学生諸君の間でも『親愛なるガウディ様』と知られるようになった。

今から二〇年前、サントリーがガウディを使って宣伝したときには、初めてのテレビコマースシャル登場ということもあり、相当のインパクトを与えたようで、その後のバブル期とも重なり、ガウディまがいの建築も多数出現した。この時期に続き一九九二年のバルセロナ・オリンプックが開催されているから、一九八〇年代から九〇年代初めにかけては日本におけるガウディのポピュラー化の時期と想定されよう。実は、一九七八―七九年にかけ日本の一〇都市で大々的なガウディ展が開催され、

ブームの下地を用意していたのである。この頃から美術関係の教科書にガウディの作品が登場し、現在では世界の教科書をも飾る存在になっている。

したがって、ガウディは決して知られぬ存在ではなく、「知る人ぞ知る」人物になっていた。ネスカフェの宣伝には「だれもが知るガウディ」というスタンスが見られる。

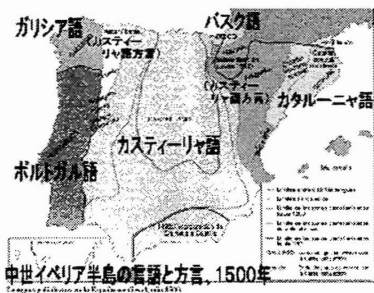
一八五二年、ガウディはスペイン北東部、北はピレネー山脈越しにフランスに接し、東は地中海に面するカタルーニャ地方の小都市レウスに生をうけた。日本でいえば幕末である。当時のレウスはバルセロナに次ぎカタルーニャ第二の都市であった。しかし、後者の人口十八万に対し、約三万の小都市に過ぎなかったため、立身出世を夢見て中等教育過程最後のところでバルセロナに移り住む。そこで生涯を全うすることになり、ほとんどの作品が同都市とその周辺に建設された。没するのは一九二六年、つまり昭和二年、享年七三歳、僅か半月後には

七四歳という年齢であった。

カタルーニャの歴史とその言語

イベリア半島では五ヶ国語が話されている。カタルーニャ語、バスク語、ガリシア語、カステイリャ語、そしてポルトガル語である。ポルトガル語以外の四ヶ国語がスペインで話されているのだが、スペイン語という名称がない。いずれも地方の名称であり、カタルーニャは地中海に面する北東部、バスクはピレネー山脈西側のビスケー湾に面する地方、ガリシアはポルトガルに接する北西部、そしてカステイリャは内陸部中央メセータ台地のほとんどの地域を占める。バスク語だけがラテン語からの派生語ではなく、起源不詳の古代からの言語であり、その言葉を使うバスク人は他のスペイン人とは異なる特殊な人種だと自称する。ピレネーを挟みフランス側にも広がるバスク地方は、エタETA（祖国バスクと自由）を意味する民族組織で一九五九年結成）によるテロ活動で日本でもよく知られている。しかし、世界から好意を寄せられたのはフランコ独裁政権（一九三九―七五）時代でのバスク独立運動としてのテロ行為であった、一九七五年以降の民主体制下のスペインではその存在意義を失い、バスク地方でもETA支持派は極めて少なく

なった。にもかかわらず、昨年九月十一日の国際貿易センター大量殺戮以降も同じテロ活動を繰り返しているのである。テロ行為が職業化された典型的な例ではないだろうか。



他のラテン系三言語のうちカステイリャ語がスペイン語と知られる言葉である。カステイリャはカステイリャ王国に由来する。コロンブスの航海を援助したのがこの王国のイサベル女王（一四五一―一五〇四）。中世末のこの時代、イベリア半島の大部分をカステイリャ王国が支配し、西部のポルトガル王国と北東部のアラゴン王国、およびピレネー山中の小王国ナバラ王国、そして南部にスペイン最後のイスラム王国、グラナダ王国（ナスル朝）が残されていた。グラナダ王国は一四九

二年に滅び、アラゴンとナバラの両王国もカスティーリヤ王国に合体吸収され、スペインの統一がなった。それ故、カスティーリヤ語がスペインの公用語となり、スペイン語と呼ばれるようになったのである。

アラゴン王国はもともとピレネー山脈中西部を支配する王国であった。この王国が一二世紀、後のカタルーニャとなるバルセロナ伯爵領国と合体し、一三一—一四世紀に最高の栄華に達する。ただし実権はカタルーニャ側が握っていた。それ故、日本では合体以降のアラゴン王国をアラゴン・カタルーニャ連合王国とも呼ぶ。中世末のカタルーニャは栄枯盛衰の諺にもれず、相次ぐペストの発生で人的資源を枯渇させ、衰退の道を歩み始めた。結局はカスティーリヤ王国に合体することにより延命を図ったのである。しかし、近世以降も衰退傾向に歯止めがかからなかった。この状況を救ったのが産業革命であり、その導入により一九世紀後半には中世に次ぐ第二の黄金時代を迎えることになる。経済の復興は文化の復興に導き、忘れ去られていたカタルーニャ語の再建にも取り組む、二〇世紀初めには地方自治権も獲得、地方自治政府を擁するまでになった。このカタルーニャの黄金時代こそガウディの時代であり、バブル期を含む経済繁栄のなかでその妙なる建築は開花したのである。

ガウディ他界後の世界恐慌（一九二九）はスペインを

も震撼させ、第二共和制（一九三一—一九三九）の誕生と悲惨な内戦（一九三六—一九三九）へと導いた。このスペイン連邦共和国時代の一九三五年一〇月六日、カタルーニャ州の樹立がバルセロナで宣言された。すなわち共和国に属しながらも、国家としての独立を宣言するものであり、独立王国としての中世黄金時代を夢見るカタルーニャ人の念願がかなったのである。しかしながら、共和国政府側が内戦で敗北し、フランコ独裁政権（一九三九—一九七五）が成立すると、すべての地方自治権が剥奪され、カスティーリヤ語、すなわちスペイン語が公用語に指定されると同時に、他言語の使用が禁止された。

私のスペイン留学というか、遊学は一九七三年から八四年で、フランコ独裁政権末期から七五年の立憲君主制への移行、さらには八二年の労働社会党政権誕生という政治的に激変した時代であった。「静寂、平穩、安全な」独裁時代に対し、民主時代は「騒々しい、わがまま、盗難が増え、危険な」社会という以前には想像できなかった事態を体験するなど、その他諸々の貴重な経験することになった。この時代の独裁制から立憲君主制の民主制に移行した一九七七年、カタルーニャの地方自治政府が復活を果たした。復活というものの、三〇年代の連邦共和国時代の自治政府ではなく、立憲君主国スペインでの地方自治政府の復活であるから、これをもって「カタ

ルーニャ州」の復活と考へてはならない。現在多用されてゐる「カタルーニャ州」という訳語は誤りと考へるのだが、いかがなものであるか。

このカタルーニャ自治政府の復活がその言語の復活に導き、カタルーニャ語の公用語化を実現させる。つまりこの地方ではカスティーリヤ語のスペイン語とカタルーニャ語の二言語を公用語にしたのである。同様に、バスク語とガリシア語も認められ、冒頭で述べたように、スペインは公式に四言語の国となった。しかしながら、禁止されていた言語を復活することは容易ではない。これら三地方では初等教育を徹底し、その地方の言語で授業がなされ、スペイン語の科目もなければ、スペイン語での授業もなくなるという極端に走った。しかし、最近ではこの行き過ぎの反省から、スペイン語の授業も一部で復活するようになったとも聞く。

ガウディ研究となれば、その時代の調査は忘れてはならない研究の基礎となる。前記した歴史が示すように、一九世紀の文献は圧倒的にスペイン語文が多く、二〇世紀に入るとカタルーニャ語文献が増え、ガウディの他界時には後者が圧倒的となる。また、一九世紀のカタルーニャ語がカスティーリヤ語に酷似するのに対し、二〇世紀に入り時代が進むにつれより一層言語の独自性が顕著になる。実はガウディ自身にもその傾向が見られた。初

等教育から大学時代までは専らスペイン語を使用し、日記すらこの言葉で書いていた。ところが、一九一〇年代以降の晩年になると、すべてがカタルーニャ語、カタルーニャ語でないと自分を表現できないと主張し、シュバイツァーに対しても、スペイン国王に対してもカタルーニャ語を押し通す強引さであった。時には状況を無視し、警察に対しても同じ行動に出たため、留置場に拘束される羽目にもなつていたのである。

当然ながら、フランコ独裁政権下に出版されたガウディ文献は専らスペイン語である。しかし、不思議なことに禁止されているはずのカタルーニャ語でのガウディ書や雑誌なども例外的に出版されていた。この時期のバルセロナに行つてもカタルーニャ語を耳にすることはなかった。しかし、民主制に移行すると同時にバルセロナの店舗ではカタルーニャ語の対応に変化した。東洋人という外国人であるにもかかわらず、こちらがスペイン語で話し始めるまではカタルーニャ語を押し通すのである。つまり、公には禁止されていても家では別ということであろう。事実、独裁時代でも、ピレネーの片田舎ではカタルーニャ語、ガリシアの農村ではガリシア語しか使用されていなかつたケースが多々見られる。だが、文献の方はそれほど急激な変化はなく、八〇年代前半まではまだスペイン語の方が優勢であつた。ところが、バル

セロナ・オリンピックの頃には形勢が逆転し、今日では圧倒的にカタルーニャ語で、スペイン語のガウディ書は稀になった。

四言語が公用語といっても、スペイン全土に共通する公用語はカステイリヤ語であるスペイン語ひとつに過ぎない。逆にいえば、スペイン語ひとつ知っていれば問題ないはずである。ところが、(ラジオを含めた)テレビという文明の利器はそうとはいえない側面を作り出してしまった。地名や人名などの固有名詞の綴りや発音の問題である。同じ名前でも言語により、綴りや発音が異なる。実況中継などのときスペイン語で話していても、地名や人名となるとその地域の言葉で発音する。したがって、スペイン語であるにもかかわらず、他言語の綴りや発音という現象が出現する。すなわち、スペイン語であってもその名称を使用せず、他言語の名称を使用するケースが増えてきた。さらに困ったことに、カタルーニャ地方以外の出身者がバルセロナに転居し、カタルーニャ語で話したとしても、自らの名前をカタルーニャ語にせず、例えばスペイン語のまま使用することも頻繁に起こる。こうなると、その人の出身地を知るか、あるいは彼が自らをどう発音しているのかを知らない限り、その人の正確な発音ができないことにもなる。

例えばガウディの場合、スペイン語では Antonio Gaudí y

Cornet と書き、カタルーニャ語では Antoni Gaudí i Cornet と綴る。前者のスペイン語発音はアントニオ・ガウディ・イ・コルネットであり、後者のスペイン語発音はアントニ・ガウディ・イ・コルネット、さらに後者のカタルーニャ語発音はアントニ・ガウディ・イ・クルネットとなる。以前は専ら最初の綴りと発音が使用されていたが、時には、前述したガウディのカタルーニャ語に対する偏執振りを尊重して二番目が採用されることもあった。しかし、最近では最後の発音が圧倒的になったといえるのである。ガウディのように著名人で、どちらの言語でも大きな変化がない場合にはそれほど問題になることはない。しかし、そうでない場合にはかなり厄介な問題でもある。

ガウディ研究機関

スペインにとって第二次世界大戦に参戦しなかったことはせめての幸いであった。しかし、大戦後の世界は独裁国スペインへの経済援助を拒み、内戦で疲弊した国力は地に落ちたまま経済の復興は遅々として進まなかった。それでも世界経済の復興に乗り、スペイン経済も一九五〇年代に入ると復興の兆しが見え始めた。

他方、建築界では一九二〇年代から大戦前までに、単

純幾何学の無装飾を特徴とする近代建築が全盛を迎えていた。モダニズムの建築、国際様式、あるいはキュビズムの建築として知られるこの建築は、王侯貴族やブルジョアの建築ではなく、一般大衆の建築であったし、ある意味で経済不況時代の禁欲の建築でもあった。したがって、大戦後の世界経済復興が近代建築への異議申立に導くのは当然でもあった。五〇年代初めとはこうした時代であり、芸術の世界ではアール・ヌーヴォーが再評価され始めていた。

この時代にガウディの生誕百年（一九五二）が迎えられ、イタリアの建築家ジオ・ポンティや建築史家ブルーノ・ゼヴィ、あるいはイギリスに亡命した美術史家ニコラス・ペブスナーなどがガウディの再評価を始めた。地元のカタルーニャ人たちも、生前のガウディを知る建築家たちを中心に生誕百年祭を準備したのである。

この一九五二年、ガウディに関する資料収集とその作品の世界への普及を目的として「ガウディ友の会 Amigos de Gaudí」がバルセロナに創設された。この機関を中心に戦後初のガウディ展が企画されたのだが、当時の経済事情を含めた諸条件が整わず、その実現は四年後の五六年に遅れた。しかし、この努力が功を奏し半年後の五七年にはニューヨーク近代美術館でガウディ展が開催され、建築家の存在は世界に発信されたのみならず、スペイン

国内でもガウディ再評価を決定的にした。戦後の日本で前衛的な芸術家たち、特に若い彫刻家や画家たちがガウディに飛びつくのはこのときであった。また、同じ一九五六年にはカタルーニャ工科大学建築学部が「ガウディ記念講座 Catedra Gaudí」が創設され、聖ルカ美術サークルにはガウディの生前を知り、その研究者でもある建築家セサル・マルティネール^{セサル・マルティネール}（一八八八—一九七三）、「ガウディ、その生涯と理論と作品」^{一九六七年刊}の著者が「ガウディ友の会」の活動の一環として「ガウディ研究センター Centro de Estudios Gaudinistas」を立ち上げた。

研究対象のガウディが余りに個性的であるために、研究者たちもまた他を受け入れない個性派が揃った結果なのか、あるいは、人の集まる場所必ず派閥が形成されるのが人の世の常であるからなのか、おそらくその後者であろうが、ここに同じ目的の機関が三つ同じバルセロナに出現することになった。いずれにしてもそれぞれは三者三様の色合いをもった。

当初、「ガウディ友の会」もまた聖ルカ美術サークル内に創設されたものである。このサークルは一八九三年、カトリック精神を基礎とする芸術を目的にガウディの友人たちにより設立された芸術家集団であり、その最高顧問は建築家の友人で、後のピックの司教トラス神父であった。ガウディもこの一員であったことから、同サー

クルに「友の会」と「研究センター」の両機関が生まれたのであろう。前者の会長にはガウディ芸術の生みの親に相当するスポンサー、エウセビオ・グエル（一八四六一—一九一八）の孫、エウセビオ・グエル・イ・ジョベルが就き、一介のサラリーマンで美術愛好家のエンリケ・カサネーリエス（一九六八年没、『ガウディの新ヴィジョン』《一九六五刊》の著者）がその事務局長を長年担当した。この顔ぶれからも「友の会」は一般へのガウディ像の普及という特長をもった。他方、「研究センター」は、会長自らが建築家ということもあって専門的な色彩の強い機関になった。具体的には一九五八—一九五九年の二年にわたり、作品への集団見学を含む連続講演会を組織し、一九六七年には第一回ガウディ研究国際シンポジウムを開催する。この時点では「研究センター」はカタルーニャ建築家協会に属していた。しかし、同センターの活動はここで停止する。

最も学術的な機関である「ガウディ記念講座」は国立大学内に設立された公の機関であり、初代の主任教授J. F. ラフォルス（二八八九—一九六五）は最初のガウディ書（一九二九）を著した研究者・建築家である。一九六八年、ファン・巴塞ゴダ（一九三〇年生）が三代目の主任教授に任命された。教授は二年前の六六年、「ガウディ友の会」の会長にも就任しており、「ガウディ研究セン

ター」の活動は停止状態にあったから、ここにガウディ研究の独占体制が整うことになる。ガウディのオリジナル図面を含むあらゆる作品や資料が「記念講座」に集中し、この講座の協力なしにガウディ展の開催は難しく、講演会には必ず巴塞ゴダ教授の姿がみられる状態が三〇年近くも続いた。国外の研究者にとって資料の一点集中は好都合であった。しかし、国内研究者にとっては面白い状態であり、当然ながら反感を買うことにもなった。その結果、巴塞ゴダ教授は定年退官後の現在、必ずしも恵まれた環境にあるとはいえない。「記念講座」に後継者を作らず、同講座の管理者という肩書きで居残っているものの、大学の教育組織からは全く除外されているのである。

例えば、一九八二年はサグラダ・ファミリア聖堂の着工百周年にあたり、カタルーニャ地方政府主催の祭典が催された。祭典の主要行事として国際講演会のプロデューズが当然のように巴塞ゴダ教授に託された。ちなみに、この講演会に招聘された世界の研究者は、スペインからは教授自身、アメリカからはJ. コリンズ教授（一九一七—一九九三）、イタリアからはR. パネ教授、オランダからはJ. モレーマ教授（一九三五年生）、そして日本からは筆者であった。しかしながら、今回の生誕一五〇年祭では巴塞ゴダの姿は見られないのである。

この事態が深刻化すれば、将来的にはガウディ研究の拠点となるべき機関の消滅を意味する。これを懸念する研究者のなかで新たな拠点作りの模索が始まった。バルセロナ在住のアルゼンチン出身の建築装飾家ルイス・ゲイルブルトと日本の建築家丹下敏明氏が「ガウディ研究センター」(www.fut.es/~cog)の復活に労をとったのである。この顧問委員会はバセゴダ教授、モレーマ教授、筆者のほか、マドリードのC. フローレス教授(一九二八年生)、「ガウディ友の会」の事務局長を務めたことのあるS. タラゴ教授(一九四一年生)、カタルーニャ地方政府重要文化財建築遺産局長A. ナパロー(一九三九年生)、バルセロナ県建築遺産局長A. ゴンサーレス(一九四三年生)で構成された。丹下氏は建築家磯崎新のバルセロナ事務所の代表であり、オリンピックではサン・ジョルディ屋内競技場を手掛け大成功を取っていた。世界的に著名な建築家の現地事務所の代表として一目置かれており、これが「ガウディ研究センター」の復活に有効に働いた。

オリンピックから二年後の一九九四年、バルセロナ県バルセロナ市、カタルーニャ建築家協会、そしてサグラダ・ファミリア聖堂建設委員会の後援を受け、第二回目の「ガウディ研究国際シンポジウム」が再開された。以後、オランダでの開催を含め昨年十一月のタラッサ市後

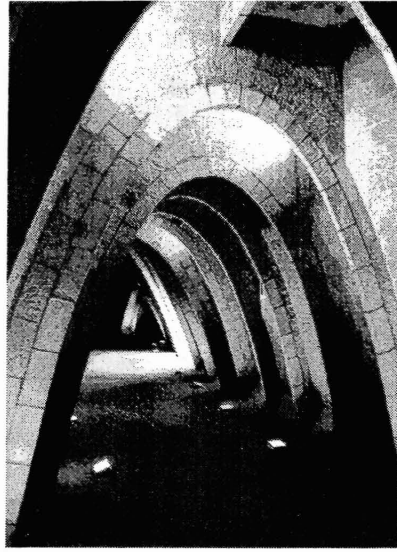
援のシンポジウムで第八回目を迎えることができた。ガウディ生誕一五〇周年の本年六月には地中海のリゾート地マリョルカ島での開催が決定されている。これで九回目である。日本での開催が期待されているが、この不況下でスポンサーを探すことは容易なことではない。

生誕一五〇周年祭

ガウディ生誕一〇〇周年は企画倒れで終わり、四年後の一九五六年、死後三〇周年の名目でガウディ展が開催されたことはすでに前述した。他方、一九八二年のサグラダ・ファミリア聖堂着工一〇〇周年祭は地方政府主催で大々的に挙行され、一大イベントの様相を呈し、祭典らしい祭典となった。これに対し、本年の生誕一五〇周年祭はバルセロナ市の主催である。

この一五〇周年祭「ガウディ国際年、ガウディ二〇〇二年バルセロナ」(www.gaudi2002.bcn.es)の組織委員長には美術史家ダニエル・ジラルト・ミラクラが選ばれた。氏は美術館「ガウディ空間」の館長である。国際オリンピック委員会のサラマンチ会長はカタルーニャの出身であり、その地方最大の銀行カッシャ・カタルーニャの役員であった。この銀行の財団がガウディの代表作のひとつ、一九八四年には世界遺産にも指定されたカサ・ミラ

(一九〇六一〇)を購入、同財団の文化センター本部とした。近年、オリンピック前から一〇年以上も続いた修復工事も完了し、屋根裏階パラボラ・アーチ群の大きな間がガウディ作品の常設展示場「ガウディ空間」として開設された。



バルセロナ、カサ・ミラ 1906-10、屋根裏階、美術館「ガウディ空間」開設

これでガウディ関連の美術館は三つになった。グエル公園内のガウディ自邸展示館、サグラダ・ファミリア聖堂地階に常設されている聖堂博物館、そしてこの「ガウディ空間」である。

ジラルト・ミラクラはガウディ研究界では無名の存在であり、建築家に関する研究業績もない。その氏が館長になり、今回の組織委員長に選ばれているのである。政

治力のなせる業という人もいるが、時代が変化していることだけは間違いない。氏の編集で印刷中の生誕一五〇年記念出版「ガウディ論集二〇〇二年」は国の内外(西米、独、伊、蘭、新西蘭、日本)から選定された二〇名の研究者による論文集ではあるが、ガウディ記念講座のバセゴダ教授が除外されているのである。日本からは筆者による「ガウディと日本文化」が掲載される。この題目は委員長から要請されたものである。現在、英語、カタルーニャ語、スペイン語での出版が決定され、日本語版も期待されているが、出版社探しは容易ではない。

この生誕一五〇年に合わせ、様々の展覧会が企画されている。グエル公園門衛館での「グエル公園でのガウディ」(三月―十二月)、バルセロナ市歴史博物館での「ガウディ、その経験」(三月―九月―九月二七日)、グエル館(演劇博物館)での「エウセビオ・グエルと建築家ガウディ、二人の男と一つのプロジェクト」(三月二〇日―十二月三十一日)、ミロ美術館での「ジュアン・ミロ、ガウディ・シリーズ」(五月三〇日―六月三〇日)、サグラダ・ファミリア聖堂博物館での「ガウディのアトリエ」(六月十四日―十二月三〇日)、カッシャ・カタルーニャ財団展示場での「ガウディ、芸術とデザイン」(六月十七日―九月三〇日)、バルセロナ現代文化センターでの「ガウディ、その周辺」(六月二十九日―九月三〇日)、

サンタ・モニカ美術センターでの「ガウディの衝撃」(六月―九月)、カタルーニャ建築家協会での「ガウディの建築家たち」(十二月一日―二〇〇三年一月三十一日)など実に盛りだくさんである。

他方、様々な講演会企画が持ち上がっているものの、現段階では一つも具体化していない。大学での聴講料を徴収しての講義はすでに何本か立ち上がっている。しかし、無料の記念講演会が具体化していない。最大理由は市にしても、県にしても、さらには地方政府にしても、その予算が取れないことにある。

よく考えて見れば、今回のガウディ年は記念出版にしても、展示会にしても、すべて利益をあげることができ。もっとも、グエル公園門衛館や建築家協会の展示会は小さなもので入場料を取らないであろうが、その他は収益が十分に期待できる。ガウディはすでに世界に普及させるような存在ではなく、彼の建築が観光客を集める時代になっている。人口約四千万のスペインは年間六千三百万(一九九五)もの観光客を呼び、国家財政の一〇%以上を潤している。その訪問地のうち、マドリードのプラド美術館よりも、さらにはグラナダのアルハンブラ宮殿よりも、さらに観光客を集めている当国一のモニュメントが数年前よりサグラダ・ファミリア聖堂になっているのである。三年前(一九九九)で年間百二十二万の

観光客が聖堂内部に入場しているが、外観だけを見て中に入らない人はそれ以上と推測されるから、全体数は相当の数に達する。

すでに資金を投入してガウディをアピールする時代は終わった。商魂たくましいカタルーニャ人たちにとって、ガウディは最高の商品になったかのようである。